

聖書：ローマ 8：31～32

説教題：御子をさえ惜しまずに

日時：2015年12月13日（朝拝）

いよいよローマ書前半の山場へと入って行きます。パウロはこの手紙で「神の福音」について解説しています。これまで一つ一つ階段を上って来た彼は、「では、これらのことからどう言えるでしょう。」と述べて、いよいよその最終結論に到達しようとしています。ここにクリスチャンが持つべき非常な確信と慰めのメッセージがあります。神への高らかな賛美、勝利の歌が歌われています。まず 31 節：「では、これらのことからどう言えるでしょう。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。」 これまでのことをまとめてパウロが言っていることは「神は私たちの味方である」ということです。もしこう言えたら、私たちに怖いことは何もなくなるでしょう。果たして私たちはこの確信を持っているでしょうか。私たちは神の御前では罪人です。神の前でさばきを受けて当然の者たちです。そんな私たちは神に近づくことは危険だと感じます。神は私に敵対しておられると思います。しかし神の福音は「神は今や私たちの味方である」と語ります。その基礎は、この手紙の最初の方で見て来た「信仰義認」の教理です。イエス・キリストを信じることを通して神は私たちの罪を赦し、義と認めてくださった。そればかりかさらに神の子どもとされたということも述べられて来ました。そして少し前の 8 章 28 節では「神はすべてのことを働かせて益としてくださる」と言われました。またこれらはすべて神のご計画に基づくことだと語られました。神は永遠の昔から私を愛して最善の計画を立ててくださり、時至って私の人生において私を救いへと召し、義と認め、将来の栄光に必ずたどり着けるように導いてくださる。どんなことがあっても、この愛であり主権者である神が私たちを最後の栄光に至るまで守り抜いてくださる。であるなら誰が私たちに敵対できようか！誰もできない！とパウロは語るのです。

確かにやがての日までは、敵対する者たちの存在が私たちを取り囲んでいます。その一つはこの世の力です。神に従おうとする私たちに色々なプレッシャーをかけて、神に従う道から私たちを引き離そうとします。また私たちの内に残る罪もそうです。罪が圧倒的な力を持って私を支配する以前の状態からは救い出されましたが、地上にある限り、残る罪が私たちに戦いを仕掛けて来ます。そして究極の敵はサタ

ンです。私たちを信仰的に意気消沈させ、墮落させ、滅びの道へ逆戻りするよう働きかけて来ます。しかし私たちはそのただ中で告白するのです。「今や神が私たちの味方である！」と。どんな存在にもはるかに勝る神が私の側についてくださると知っていれば、恐れることはもはや何もないのです。

旧約聖書の有名なエピソードの一つにⅡ列王記 6 章でエリシャがアラムの王の軍隊に囲まれた時の話が出てきます。ある朝、エリシャと一緒にいた若い者は、アラムの軍隊に囲まれていることを発見して悲鳴を上げます。「ああ、ご主人さま。どうしたらよいのでしょうか。」 エリシャは言います。「恐れるな。私たちとともにいる者は、彼らとともにいる者よりも多いのだから。」 そしてエリシャが「どうぞ、彼の目を開いて、見えるようにしてください。」と祈るとどうだったでしょうか。若い者は火の馬と戦車がエリシャを取り巻いて山に満ちているのを見ました。すなわちそれまで肉の目には見えなかった神の圧倒的な守りが自分たちを取り巻いているのを彼は見た。私たちもこれを見る必要があるのです。あらゆる戦いにおいて、神が私たちの味方でいて下さる。その神を認める時、私たちはどんな戦いの中にあっても、「だれがこの私に敵対できるでしょう。」と告白して安らぐことができるのです。そして神に信頼し、その導きに委ねて従って行くことができるのです。

さて、この神の絶対的な守りを確信できるための決定的証拠をパウロは 32 節で語ります。「私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。」 ここで取り上げられているのはイエス様の十字架です。ここに神が私たちの味方であることの不動の基礎があることをパウロは述べようとしています。私たちはイエス様の十字架をどのように見ているのでしょうか。大きく分けて三つの見方があると言えます。一つ目はイエス様の十字架はこの世の人々のわざであるという見方です。確かに人々がイエス様に手をかけました。人々が陰謀を巡らし、イエス様を捕らえ、不当な裁判によって断罪し、十字架にかけて殺しました。これは事実です。しかししばしばこの見方に伴いがちなのは、イエス様は弱々しいというイメージです。イエス様は立派な教えを宣べ伝えたけれども、人々に受け入れられず、結局は捉えられ、殺されてしまった。イエス様は弱かった。これは正しくありません。

第二の見方は、イエス様の十字架はイエス様がご自分から選び取ったものであるということです。イエス様はやがて十字架にかかっているのを捨ててを繰り返して予告されました。そして自らエルサレムに向かって進まれました。普通、私たちは恐ろしいことが行く先にあつたら、後ずさりし、逃げ出したいくなるものです。イエス様の内にも非常な戦いがあつたことが福音書から分かります。イエス様はやがての苦しみを思って心を騒がせたり、不安の言葉を口にされたり、汗を血のしずくのように滴り落とす格闘をされました。しかし私たちが見なければならぬのは、そのように苦しみ喘ぎながらも前に向かって進み続けたイエス様の姿です。ここにあるのは非常に強い人の姿です。イエス様は十字架上で叫びの声を上げつつもそこから降りませんでした。これは弱い人の姿ではなく、むしろ考えられないほどに強い人の姿です。これは世の多くの人と全く異なる視点でしょう。しかしこの見方に起こりがちな誤りは、イエス様はこうして父なる神を説得されたという考えです。神は私たちをさばこうとしたが、イエス様はご自分の犠牲をもって父なる神に懇願された。それで父なる神はさばきをやめられた。ここにあるのはイエス様こそ私たちの味方であるが、父なる神はそうではないということです。これも正しくはありません。

第三番目の見方、そしてこれは今日の節が述べていることですが、イエス様の十字架は父なる神のみわざであるということです。32節にイエス様を「死に渡された」のは神であるとあります。これが聖書の究極的なメッセージです。イエス様の十字架は神から出たのです。神が私たちためにご自身の一人子さえ惜しまずに死に渡してくださったのです。このことが分かる時に、私たちは神の愛についての絶対的な確信を持つことになるのです。

もう少し詳しく二つのことを心に留めたいと思います。一つ目は神は私たちのために「誰を」死に渡されたのかということです。ここに「ご自分の御子をさえ」とあります。先に私たちは神の子どもたちとされたことについて触れました。しかし前に見ましたように、私たちは養子として神の子どもという立場に迎えられた者に過ぎません。それに対してイエス・キリストは永遠の昔から父のふところにおられる唯一独特な神の子です。従って神にとっては言葉に尽くすことのできないかけがえのない方です。これ以上はあり得ない最も大事な方です。その御子を神は私たちのために死に引き渡された！なぜでしょうか。それ以外には私たちの救いはなかつ

たからです。私たちが救われるためには、罪が全くない人間が身代わりに罪を担わなければなりません。しかしそんな人間は世界中のどこにもいません。また救いを必要としているのは一人ではなく、無数に多くの人々です。どうやってそれだけ多くの人々を救うことができるでしょう。残された唯一の方法は、神がきよいご自身の御子を人として遣わし、この方に多くの人々の罪を全部背負わせることです。神である方が人となってそのいのちをささげるなら、無数の人々を救う価値と力を持ちます。神はそのためにご自身が持てる最大のものをささげたのです。かけがえのない御子さえも差し出されたのです。

もう一つ心に留めたいのは「惜しまずに」という言葉です。この言葉で思い起こされるのは創世記 22 章のアブラハムのイサク奉獻の記事です。あそこで神はアブラハムに「あなたはあなたのひとり子を惜しまなかった」と繰り返し語っています。私は以前、アブラハムのストーリーを映像化したビデオを見て、このことを深く考えさせられました。ご存知のようにイサクはアブラハムが待つて待つてついに 100 歳の時に与えられた大切な子どもです。自分の命よりも大事な息子です。ところが神は、その子イサクをモリヤの山で全焼のいけにえとしてささげよ！と命じられます。アブラハムにとってどんなに厳しい試練だったでしょう。しかし彼は翌朝早くイサクを連れて、モリヤの山へと出発します。そしてついに山頂でイサクを縛り、ほふろうとします。刀を振り上げて、それを振り降ろそうとする瞬間、そこにアブラハムの色々な思いが交錯する深い苦悩の姿が映像で映し出されました。彼は神を愛して、そのことをしようとします。その姿を見た時、私はそこに神の姿をダブらせて見ないわけにはいきませんでした。神が私たちを救うためにどんなに深い苦悩を味わわれたかを知りました。と同時に神がどんなに私たちを愛して下さったか、ということが迫って来ました。アブラハムにとってその一人子をささげることがこんなに苦しいことなら、ましてや永遠の昔からのただ一人の御子キリストをささげた父なる神の苦悩はどれほど底知れず深いものであったことか。しかしアブラハムと神との間には、大きな違いがあります。それはアブラハムは次の瞬間に「その子に手をくだしてはならない。」と御使いから声をかけられてイサクをほふらなくて済んだのに対して、神はご自身の御子を実際にほふられたからです。この神の御子こそ本来は何にも優先して惜しまれるべきお方です。ところが神は私たちを愛するあまりに、この御子さえも惜しまれなかった！そして神は私たちのような者を惜しんでくださったということを聖書は語っているのです。

このことを見るなら、私たちは何と結論すべきでしょうか。それはこの方がどうして「御子といっしょにすべてのものを私たちに恵んでくださらないことがありますよ。」ということでしょうか。神はご自身の最愛の一人子まで惜しまずに私たちに与えて下さいました。とするなら、どうしてこの方がその他のものを私たちにケチるはずがあるのでしょうか。御子といっしょにすべてのものを惜しみなく私たちに与えてくださるはずではないでしょうか。もちろんこのことは私たちの願うことが全部その通りになえられるという意味ではありません。億万長者になれるとか、常に健康でいられるとか、欲しいものが何でも手に入るということではありません。もちろん神はそうしようと思えばそうすることができます。しかし私たちにとっての真の益は、29節で見たように、御子の姿に似た者になることです。あるいは30節で見た栄光という最終ゴールに到達することです。その一大目的に向かって必要となるものはすべて必ず満たして下さる。霊的にも物質的にも惜しまずに御子といっしょにすべてを与えて下さる。このことを心から確信するなら、私たちはどんな中でも恐れることなく、この神と共に歩んで行けるのではないのでしょうか。

この32節は28節と同様に、困難の中で告白する言葉です。たとえ今欠乏しているような状況にあっても、あるいは多くの悩みの中にあっても、様々な戦いの中でうめいていても、神は御子といっしょにすべてを私に恵んで下さる。必要を必ず十分に備えて下さる。私たちはそのようにこの御言葉を告白して歩みたいと思います。どんな中でもイエス様の十字架を通して確実に言えること、それは神の私たちに對する愛は確かだということです。神は私たちの味方であるということです。ですから私たちはどんな中にあっても恐れる必要はないのです。焦ったり、動揺しなくて良い。人間的な手段に走らなくて良い。おどおどしてあちこちに助けを求めて走り回らなくて良い。神が私たちの見方です。その神を喜び、神に信頼していることを、みことばに従う歩みに現わして行けば良い。神はすべてを用いて必ず益へと導いて下さいます。御子さえをも惜しまずに与えて下さったお方として、御子といっしょにすべてのものを私たちに恵み、栄光に至る道を確実に最後まで間違ふことなく導いて行って下さるのです。